鯛飯

河　美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鯛飯

【Ｎコード】
Ｎ５８９４Ｍ

【作者名】
河　美子

【あらすじ】
すみれは都会でアルバイト生活。だが、苦痛な生理が今日も襲う。

廃校になった小学校の角を曲がると、祖母の家が見えてくる。
小さな平家の軒下には玉ねぎがぶら下がっている。きっと庭の井戸にはスイカも入っていることだろう。母に頼まれて普通列車に乗ったのだ。無人駅の改札はこの町が細く貧しくなっていることを表しているようだった。
「おばあちゃん、いる？」
返事はないが、玄関は開きっぱなしだ。きっと畑に行ってるのだろう。
荷物を置いて裏の畑に向かう。
この暑い中、サツマイモのツルを刈り取っている。私の好物なのだ。蕗よりはるかに美味しい。
「おばあちゃん、どっさりツルがとれたねえ」
「ああ、すみれか。待ってたよ。今日は芋のツルを煮ようかね。好きやったろう」
「うん、大好き。このかごを持って行くわ」
かごには、たくさんのツルとシシトウとピーマン、トマトが入ってる。
「おばあちゃん、すごいねえ。どれも美味しそうな色だわ。トマト一つ食べていい？」
「好きなだけどうぞ」
がぶっと思い切り大きな口をあけて、トマトにかぶりつく。爽やかな甘さと酸っぱさがたまらない。
「美味しいわ。都会にはないわ」
「そうかい、持って帰ったらいいよ」
「うん、でも、ここで食べて行くからいいわ」
「今日は芋のツルのほかには、シシトウの葉っぱを炒めて佃煮にしようかね。あとはタイの炊き込みご飯だよ」

「ご馳走だわ。私も手伝うから」
「いいよいいよ。簡単なものばかりだから。そうだね、タイの骨はのどに刺さると危ないから、それをとってもらおうかね」
「大丈夫。私は両目とも見え過ぎぐらい見えるから」
二人で笑いながら、家に帰る。
場違いなほど大きな冷蔵庫は、父が買ったものだ。祖母が古い冷蔵庫が壊れたと電話で話していると、その日のうちに大型電器店に行き配達させたという。
祖母は笑いながらも、あまりに大きな冷蔵庫に驚いたようで、
「死んだらここに入れてもらうわ。腐らんから」
「バカなことを言うなよ」
父も苦笑いしていた。
「確かに一人暮らしなのにでか過ぎたかなあ」
父はカタログに出てる立派な冷蔵庫を見てそう言った。
祖母は父が家を新築する時も一緒に住もうと呼びかけたが、一人がいいとどうしても世話になるのはイヤと拒んだ。母がどこかホッとしている様子を見せたのを、私は見逃さなかった。
私は祖母のことが大好きだったが、それも、大人になるにつれて田舎へ行くことは減った。やがて、大学も卒業したけど就職もなく、都会でアルバイトしながら一人暮らしていた。そんな私に子宮筋腫が見つかった、痛みがひどくなり、子宮内膜症も併発した。
こうなると、油汗を流すほどの痛み、出血の多さに立ち仕事は不可能になった。しょっちゅうトイレに行かなければ溢れるほどの出血は、女であることをひどく惨めにさせた。制服のスカートの下には、サニタリーショーツにナプキン二枚がさね、しかもタンポンも使って、ガードルで締め付けた。
働くということは、十三センチの筋腫を持った私にはきついことだった。結婚もしてないし、筋腫を取るということは恐ろしい気もした。このまま子どもができないことにはならないと、先生は教えてくれたが、なかなか踏ん切りがつかなかった。

だが、あの日、バイト先のレストランで注文を聞いていると、一人の老婦人が近寄って来た。
「あなたね、スカートの後ろに血がついてますよ。みっともない」
血の気が引いた。まだ、一時間も経っていないのに、女が溢れてきているのだ。この昼間の忙しい時間になんてことだ。老婦人は私を物臭な女と見たのだろう。みっともないの言葉に、耳まで赤くして倒れそうになりながらも、更衣室に走った。
スカートについてる染み。ピンクのスカートが三センチほどの染みを浮かび上がらせている。替えのスカートにはき替え、ショーツとナプキンとタンポンを持ってトイレに行く。哀しいほどの出血に泣けてくる。
頭の中に「みっともない」の言葉がこだまする。堰を切ったように涙があふれ、何でこんなことまでして、ここでバイトしてるのかと私は都会に別れを告げることにした。
今までしっかり者の娘が生理で帰るなんて、私のプライドが許さなかった。でも、無駄なことだと思い知った。どうせ仕事を探すなら、もっとじっくり探したい。
家に帰ると、父も母も何も言わなかった。でも、突っ張って来た私には居場所がない気がした。
母は部屋に閉じこもる私に
「おばあちゃんの様子を見てきてちょうだい。最近、音沙汰がないのよ」
私はこの場から離れられると二つ返事で引き受けたのだった。
「すみれ、この鯛だよ。大きいだろ。骨が硬いから全部取ってよ」
「うん、美味しそう」
ごはんの上で蒸しあがってる鯛は薄紅色で、新鮮な香りを放っていた。頭を取り、骨を一つ一つ取っていく。
「お母さんが心配してたよ。すみれが何にも言ってくれないって」
「そう。話すことないもん」
「鯛はね、めでたいことに使うだろ。お母さんが嫁に来た時に、こ

の鯛飯を作ったらのどに骨が刺さってね。病院まで行くことになったんだよ。私は意地悪しているように思われるだろうって、随分辛かったよ」
「ふーん、そんなことあったの」
「もう、結婚式の時だから二十年以上も前のことだね。それからは、何だか遠慮がちになってしまったよ」
母はそう言えば祖母の家に来ることはあまりなかった。父とはよく来たが、母はいつも用事があるといって来なかった。
「すみれ、その鯛を持ってきて」
骨を取った鯛を醤油の香りのするごはんにさっさと混ぜ合わせていく。本当に美味しそうだ。子どものときから大好きだった鯛飯。母は作ってくれなかったが、祖母の家ではいつも食べた。父も私も大好物なのに。
食卓に並ぶ彩りのよい鯛飯、鯛のアラで作った澄まし汁、ツルの煮物、シシトウの佃煮。そして、祖母特製のキュウリの浅漬け。
「すごい、きれいねえ」
「そうかい。しっかりお食べ」
「いただきます」
母は今回なぜここへ来させたのだろう。ここが心休まる場所ってどうして分かったのだろう。祖母は箪笥からたくさんの葉書を出してきた。
「これ、お母さんがくれた葉書だよ」
母は絵手紙を習っていた。大きなミカンや手袋、日用品や草花、いろいろ描かれていた。短いけど心温まる文字の数々。ふと、写真立てにも母の絵手紙を飾ってるのを見た。驚いたのはその絵、私の手だった。
疲れて帰って来た娘の手。
私がリビングで寝ていた時の手。疲れてうなだれて話もしない娘。母がどんな気持ちで描いたのか、涙が止まらない。私の様子を見て祖母は

「気持ちはいつか伝わるよ。でも、言葉にすればもっと早く伝わるよ」
「うん、うん」
言葉は出てこなかった。私は家に帰ったら母ときちんと向き合って相談しようと思った。
冷たく見えても優しい母。そんな母を知っている祖母。
「おいしいのに、冷めちゃうね。ごめんね。さ、食べよう」
胸につかえていたものが全て取り除かれたようで、私は大きく深呼吸して食べ始めた。
「おばあちゃん、この鯛飯、明日少し貰って帰る」
「そうかい、じゃあ、明日の朝、もう一度炊こうね。炊き込みはいたみやすいから」
父と母が喜んで食べる姿を容易に想像できた。

「おばあちゃん、本当に長生きしてよ。きっとよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5894m/

鯛飯

2010年11月13日18時10分発行